

分散・集中・現場

- 個人史的にみた国立大学図書館考 -

Variance, Centralization and Job Site;

Life historical consideration on the National University library

名古屋大学附属図書館情報管理課資料管理掛
Nagoya University Library

島 岡 眞
SHIMAOKA, Makoto

Abstract

National University libraries will be abolished in March 2004. They are going to make a fresh start as University libraries under National University corporations. On the very year, the author who have worked 37 years at the library become a retirement age.

This article investigates what is a National University library by the viewpoint from the job site, which consists of five points as follows; 1) Transition of the number of the personnel and the length of their services, 2) University Library Policies by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 3) Library materials theory, 4) Cataloging, card catalog and book racks, 5) Electronic processing and On-site feeling.

1. はじめに

2004年3月末をもって、国立大学附属図書館は廃止となる。国立大学法人の下に大学図書館であったり、情報センター等々の名称になるものと思われる。奇しくもこの時、筆者は国家公務員としての定年を迎え、1967年大学図書館に就職以来、37年(名古屋は35年)の経験を終えることになる。

名古屋大学の源流とされる明治4年の仮病院から130年余、官立医科大学としてのスタートからの72年を顧みるとき、この35年はそのごく一部にすぎない。図書館の歴史や図書館論を記すには僭越であることを承知のうえで、個人の仕事に関わった部分にしぼって、国立大学図書館がなにであったのかを考えてみたい。狭い、個人的体験にす

ぎないが、長い現場経験とそのデータを提供することは、いずれ国立大学図書館を歴史的に振り返るときなんらかの意義を有するであろうし、法人化の前に辞めていく人間の特権(?)としてお許しいただけるものと思っている。

名古屋大学図書館の歴史を繙くとき、対外的に高い評価を受けた事跡として思い浮かぶのは次のような人たちの業績であろうか。古くは明治13年、かの<大調査機関>でも有名な後藤新平が医学校長の折に図書館の重要性と将来の構想を謳い¹⁾、名古屋医科大学の時代には清川陸男が司書官として、全国医学図書館の総合目録事業や協力体制作りに実績を挙げている²⁾。戦後には満州引き揚げから大学図書館に職を求めた寺田良喜氏が、20数

年に亘る洋書目録業務の一方、私的10数年の労力を傾注して「ロシア・ソヴェト人名辞典訳編原稿」を作成した業績に対して、昭和41年第1回の岸本奨励賞（現国立大学図書館協議会賞）を授賞している^{3, 4}。また、昭和61年には川原和子氏が「欧米貴重書図書館の慣行 - 保存修復を中心として -」に関して第21回の協議会賞を受賞している^{5, 6}、これは経済学部20数年の貴重図書収集・整備という蓄積のうえでの荣誉といえる。このような歴史のなかで、昨年度の協議会賞を図書館の若手グループの活動が「和漢古典籍に関する知識と技術の伝承プロジェクトグループ」として評価されたことは、新しい時代に向けての励ましと位置付けられるであろう。

これらの人々を育ててきた名古屋大学図書館の流れを筆者の体験のなかで、牧歌的と言われる分散化の時代、否応なく集中化に翻弄されている現在を、現場の視点から記していきたいと思う。

2. 職員数の推移と経験年数

表1をご覧ください。この表は筆者が名古屋大学で勤務を始めた、昭和44年以降の図書館関係者を毎年本部事務局から刊行される『名古屋大学職員録』の「図書館」及び「学部図書掛」の名簿をもとにして人数及び変動を数値化したものである。従って、ここには理学部や工学部の学科図書室の人数は加えられていないばかりでなく、この『職員録』の調査時期が必ずしも一定しないため、各年度の人事異動と一致するものでもないこと等から、この表が名古屋大学図書館の人事の全体を表す正式の数値ではないことを予めご承知おきいただきたい。

まず、この表について多少の説明を加えておきたい。本来このような統計的データには固有名は不要と思われるが、この文章が個人史としての視点から図書館を考えるという位置付けにあることから、敢えてこの間の館長、部長、課長は固有名で表記させていただいた。上記で但し書きしたように、各年度の人事異動とは必ずしも一致しないことはこの『職員録』の調査年月を表記していることをご理解いただきたい。課や掛の名称は基本的にはその当時のままにしたが、内容の変更を伴わないわずかな名称変更は煩雑さを避けるため、同一名称にまとめてある（例、参考掛・参考調査

掛等）。掛員、補佐員の区別は各年度の『職員録』どおりであるが、現在使われない用務員、臨時用務員等は上記の区分に統一し、また助手、教務員等の身分でいたものは掛員にまとめてある。

具体的な説明をすると、まず各項目の数字は人数を表記し、その後続く「と」内の数字は次年度の『職員録』までに変動の会った人数と、その変動した人間がその部署にいた年数を表わしている。例えば、筆者が昭和54年第一整理掛から閲覧掛へ異動した場合は、53年の掛員欄に当時の人数5名と異動人員が掛内で3人、筆者の同掛経験7年を、「5 ; >」として記載している。

この表で見ると昭和44年以来この34年間に、筆者が何らかの形で関わった図書館の人たちは、館長7人、部長13人、課長30人、課長補佐11人、専門員17人、掛長204人、掛員338人、補佐員219人という人数になる。これを各掛毎に集計したのが表右の最終欄である。

また、最下段は年度毎の集計として、各職階別の人数と異動人員及びその経験年数を表わしたものである。これで見ると、部課長及び補佐、専門員は4人から8人へ、掛長は17人から20人へと組織的拡大が計られたのに対して、掛員は昭和44年の60人を最高に漸次減少を続け、現在は30人となっている。なお、補佐員は『職員録』への記載が昭和44年から始まり、当初の20人から漸次増加し30人をピークに現在にいたっている。

異動の点からこの表を見てみると、昭和50年までの変動の少なさは部課長以下、掛長、掛員にも共通した数値で顕れている。当附属図書館に部課長制がしかれたのは昭和40年であり、東大から着任した男沢整理課長が翌年部長に昇任し、昭和52年の退官まで11年間在職しているばかりか、整理課長・閲覧課長もそれぞれ9年、6年という在職期間である。以後は2、3年で替わる部課長人事が普通となり、その流れは掛長、掛員人事へ波及していくといえる。掛長異動が0、掛員異動が2名という極端な年は例外として、掛長の異動率は40年代の10数%から近年は3人に1人の割合になっている。これを経験年数で見ると、掛長は昭和54年の7.7年を最高にこの7、8年は3年未満となり、掛員も昭和49年の11年を最高に今では2 - 4年が普通となっている。

図書館の主要な動きとこの表を重ねて見ると

下のものである。旧来の古川図書館に別れを告げ、教養部図書室の学習機能を引き継ぎ、工学部の一部も取り込んだ新中央図書館が現在地で総合図書館を目指してスタートしたのが昭和56年、その年3課制となり掛が1、中央図書館の職員が11人の増となり、蔵書数も27万冊から38万冊へ増大する。この新築移転に伴い翌年から本格的業務電算化が始まり、情報資料掛が廃止され学術資料掛が誕生、昭和62年には学情センターへの目録登録業務を開始する。平成6年には中央図書館の増築が完成し、平成8年にかけて部局から30万冊もの資料が移管され、中央図書館の蔵書が一躍94万冊となったが中央図書館の職員の増加はなく、むしろ定員削減の時期と重なっている。しかも、この蔵書数の拡大は必ずしもその量に見合った質が伴ったとはいえず、部局の利用稀少資料の集中、複本の増大等として以後の蔵書運用上の好ましくない付加業務として現われる。

この<人員配置変遷表>が図書館の活動・歴史とどのように関連してきたかは、いつか綿密な分析がされることを期待して、ここではデータ提供にとどめることにする。

3. 文部科学省の大学図書館政策

表2は文部科学省の国立大学図書館関係予算を昭和42年以降でみたものである。典拠は『大学資料』の「国立大学図書館の整備充実について」⁷⁾を昭和54年度まで、そして『大学図書館協力ニュース』の「図書館関係予算の概要」⁸⁾を昭和55年度以降は使用している。但し、両資料とも項目の内容・順序が必ずしも一定しないため筆者の判断で入れ替えたり、2、3年の短期予算項目である場合は割愛したものもある。特に『大学資料』は当該年度の重点施策の概略的説明が主であるため、予算額が記載されない項目が多く統一的な一覧性に欠けるが、最も入手しやすいデータとして利用することにした。また、両資料とも金額は千円単位で記載されているが、ここでは百万円単位にまとめてある。

筆者の最初の勤務は昭和42年の岡山大学附属図書館閲覧係である。当時岡山大学は指定図書実験校の全国11大学・短大の一つとして、積極的にこの制度の運用を心掛けていた⁹⁾。就職して間もない筆者が、担当係として先輩諸氏の指導を受けな

がらこの指定図書制運用の報告をし、まとめたのが「指定図書の運用について - 特に自由接架式の場合 - 」¹⁰⁾である。指定図書を一般の開架図書とどう関連付けて運用するかをテーマにした、つたない報告である。この指定図書制度の予算配分大学は第1期11校、第2期10校、として昭和50年度まで続いた政策である。名古屋大学における指定図書制度は、当時の教養部図書室による『指定図書目録』として昭和45、47年にまとめられている。当時、指定図書制は大学教育と図書館のあり方の問題として論議され、昭和45年からの11年間で32件の論文が発表されているほど当時の大学図書館界の重要な課題であった¹¹⁾。しかも、文部省の政策中止後もいくつもの大学でこの制度は試みられているが¹²⁾、その論文発表を最近ではほとんど見ないばかりか、この政策の評価も明らかにならないまま、「停滞の一途をたどっている」、「定着しないで終わっている」との解説を見るのみである^{13, 14)}。

次の政策として筆者が身近に意識したのは、参考図書の充実という課題であった。表2を見ると昭和53年から60年の間は空欄であるが、その後の推移から昭和50年の5300万円をピークに漸減しているものと思われる。筆者は昭和44年から46年の3年間参考掛担当であるが、当時の図書館本館(古川図書館)は研究図書館的機能を中心として、全学に分散していた学部図書室の結節的役割を担っていた立場からも、参考図書のもつ意義は大きかった。「British Museum General Catalogue」や「National Union Catalog」は学内のみでなく、東海地区においても重要な参考図書として存在していた。全国的な参考図書の整備は昭和43年、名古屋大学が国立大学図書館協議会の委嘱によって『参考図書選択目録』¹⁵⁾として全国に選書指針を報告・発表し、昭和46、48年に所蔵『参考図書目録』和書、洋書準備版として刊行した。しかし、残念ながらその後の完成版を見ず、この政策が名古屋大学で果たしてきた役割や全国的な評価等が課題とされることなく現在にいたっている。

一方、学術情報システムの構築・整備の政策は、上記の問題等よりはるかに大きな変化を大学図書館にもたらしたばかりでなく、より広範囲にその影響力を現在もあたえつつあるといえる。筆者にはこれらの問題を語る資格も能力も持ち合わせな

いたため、その一部を体験的に記すことにしたい。

名古屋大学の本格的な業務電算化は、中央図書館が昭和57年現在地に新築移転してきたのを契機としている。全国的には、昭和46年の大阪大学を最初に群馬大、東工大と順次拡大するなかで、各大学職員組合等との軋轢も問題になりつつあった¹⁶⁾。このような折、昭和55年の文部省大学図書館職員長期研修に参加の機会にめぐまれた。その年の始め「今後における学術情報システムの在り方について」の学術審議会の答申が出され、この長期研修の内容はその答申の解説とこれを受けた大学図書館の任務が専ら中心となった。この答申に謳う大学図書館の学情システムにおける役割は、その重責を担う意識として若い講師の講演の端々に伺える気負いのなかに表われ、それはある種の違和感として筆者には感じられた。

この研修報告を例年のとおり図書館報掲載の依頼により提出したのだが、内容が不適当として掲載拒否されるという「事件」を惹起することになった。この経過の感想は「館燈」の発刊100号記念特集¹⁷⁾に書かせていただいたが、改めてこの稿のなかでふりかえると次のようにまとめられるかと思う。

当時、社会全体が高度成長期に向かう只中にあり、文部行政もその影響下にあったことは否めないことであった。このような時代の「傲慢さ」が無意識のなかに現れていたことは、現在になりそれぞれに感じているところであろう。その時代のなかで「傲慢さ」をどう感じるのかは人それぞれであっても、それを表現した媒体を提供することは図書館の大きな役割のはずである。残念なことに、研修の感想は不適當であり、文部省の政策を批判するような文章は公表できないとの結論となった。政策は様々の反論や現場からの批判を踏まえてこそ活かされるはずだが、文部省の人事や予算を意識する当時の管理職にとっては、このささやかな一文も表面化させたくなかったようである。

4. 図書館資料論

筆者の関わりのなかで図書館資料について、幾つかの点を記しておきたい。

先の図書館政策でふれた表2にある図書館設備費のなかの図書購入費を見ていただくとお分かり

のように、図書購入費は昭和50年代半ば、学生用図書費は平成の初期をピークに、現在はその40%台に激減していることである。幸いなことに名古屋大学においては、全学的な蔵書整備アドバイザーによる図書館への支援・協力活動等¹⁸⁾が本部事務局、教養教育院等で評価していただいたこともあり、全学共通経費や全学教育経費の援助を受けることによって大きな支障をきたすにはいたっていない。しかし、このような資料購入費とくに学生用図書費の減少は大学図書館にとって、今後の重大な問題であることに変わりはない。

一方、研究用資料費の点で記しておきたいことは、情報文化図書室での体験である。一連の教養部改革の結果、情報文化学部としてスタートする経過を見ながらの4年間の勤務であるが、新学部創設にかけた熱意とは裏腹に、研究者の図書資料に対する意識改革のなさを痛感した時期でもあった。図書資料を共同の研究資料として活用するという意識自体、長い教養部の科目制の歴史からは生まれにくかったのかもしれない。社会主義の衰退とともに幾つかの研究室から戻される『マルエン全集』や『MEGA』が何セットも狭い書庫を埋める状態は、研究用図書の充実を願う図書掛としては見過ごせない事態であった。このような問題を独自資料の紹介を兼ねて、組合の支部ニュースに「私の勧めるこの1冊 - 読書欄新聞 - 」¹⁹⁾として遠慮がちに訴えたのが平成5年である。

部局図書室では、それぞれの歴史に応じた独自の資料を所蔵しているが、それらの資料が埋もれているばかりでなくお荷物として、時として処分危機にあることを考えてみたい。

医学部分館は医学校としての明治初期以来の蔵書を有するが、これらの資料が図書館の一隅に埋もれていたことを当時の小島分館長等が歎き、卒業同期会の事業として500万円の寄附による史料室整備としてそれらが蘇ることになった^{20, 21)}。その史料室紹介を『医学部学友時報』へ昭和61年から62年にかけて4回にわたって掲載させていただいた²²⁾。この門前の小僧的文章の誤りを安井広先生(故人、医学史家)に指摘していただき、その結果当大学最初の学術雑誌であり、所在が不明であった『医事新報』を一宮の浅井病院森家から寄贈を受けるという幸運に巡り合うことになった。この経緯や内容を『名古屋大学史紀要』の創刊号に

掲載させていただいた²³⁾。

また、たまたま医学部庶務掛から届けられた一通の手紙（医学校教官であった祖父の事跡の問い合わせ）に対し、関係資料を提供するなかから一冊の本『解剖学者奈良坂源一郎』²⁴⁾が生まれた。なお、この改訂版の刊行準備が進められているが、そこでは氏の尾張本草学との関係、初期博物学教育への関わり等が明らかにされそうである²⁵⁾。

歴史の古い医学部ではあるが、現在の先端的成果に追われる研究者を専らの奉仕対象とする図書館にとっては、このような古い資料群はお荷物としてみなされがちである。しかし、歴史や過去の蓄積を抜きにした高い成果はないこと、図書館はその保証の場であることを常に自戒していいたいと思う。

医学部がその歴史の蓄積からくる資料をどう保存し活かすかが課題であるのに対し、教育学部は新制学部としての資料蒐集へかける努力がその資料論の一面として考えられる。

教育学研究の最も基礎となる資料の一つに「学校一覧」がある。古書店を通じたこれらの収集は学部創設以来鋭意続けられていたなかで、商議員でもあった篠田先生が古川図書館の未整理資料のなかから多数の「一覧」を見出し、学部の貴重な資料として生き返らせることができたのは、書庫のなかを逍遙する研究者の習性と眼力によってである。これらの資料群は図書室の先達により何度かリストとしてまとめられていたが、本格的に「『旧制学校一覧』所蔵目録について」として、篠田弘先生との共著で教育学部紀要に報告することができた²⁶⁾。

また、教育学部ではフィールドワークが教育・研究方法の主であるだけに研究室に集まる資料の整理・保管が大きな課題である。そのなかで、技術教育の佐々木先生が20数年をかけて収集してきた全国の高等学校の創立記念誌等が退官を機会に図書室で受け入れられることになった。その一部は研究室でデータ化されていたこともあり、その後は図書室でデータを完成し『全国高等学校史誌所蔵目録』として、教育学部図書室ホームページで発表した。この目録の意義を佐々木先生が『中等教育史研究』で解説していただいた²⁷⁾。（その後これらの資料は中央図書館へ移管され、「中等教育コレクション」として現在も拡大しつつあ

る。）

5. 目録・カード・書架

筆者の目録業務担当は昭和47年から53年までの7年間の第一整理掛（和書）である。この時期はたまたま、日本の目録規則改定の時代とも重なり貴重な経験であったと思っている。名古屋大学では以前から『日本目録規則1952年版』を採用してきており、著者主記入（主標目）の基本的考えが目録法の原則であった。これは戦前以来の「図書を表わした著者をもってその図書を代表させる」という、いわば<人間第一主義>の考えである。従って、その主標目を判断するのが目録担当者の主要な仕事ともいえた。ときにはその判断をめぐる、論争が繰り広げられ（挙句に取っ組み合いをしたという伝説が生まれ）たりした。隣の洋書目録掛が倉橋英逸（現関西大教授）永田春樹（現筑波大教授）寺田良喜（ロシア人名辞典による第一回岸本賞受賞者）等の錚々たるメンバーを擁し、英米目録規則のもとで寡黙に仕事をこなしているのとは対照的であった。

1961年のIFLAの目録原則国際会議を受け、『日本目録規則1965年版』が誕生、名古屋大学でも1977年採用となる。これにより著者主記入の考えが大きく揺らぎ、次の1978年の『日本目録規則新版予備版』で記述独立方式が目録法の基本となる。以来主標目を巡る侃侃諤諤の議論は無用となったといえる。国会カードの複製利用が始まった頃に筆者は目録担当を離れるので、その後のNCへのデータ入力業務等とは直接の関係をもつことなく現在にいたった。

昨今大変有名になった<金正日>を<キンセイジツ>でなく<キム ジョンイル>と読み、表記するのは現在では常識となっているが、80年代までは図書館界においても<母国語音主義>は異端視されていた。韓国・朝鮮人名を日本の漢字音読みでするというのが当時の社会常識であり、それに裁判で争った崔昌華氏の<一元玉本名訴訟>を図書館の問題として小さな勉強会を続けたのも<著者主記入>の背景があったからである²⁸⁾。

現在、中央図書館のメインフロアに「全学総合目録カード」150万枚が置かれている。カード目録による検索を知らない世代が一般的となり、全学の遡及入力が進みつつある現在、これらの全学

カードは近い将来無用の長物として処分されるであろう。目録業務の全学集中化を早い時期から進めてきた名古屋大学の全学総合目録の質の高さは全国的にも認められていた。古川図書館時代は当時の図書館の基本方針「よく連絡調整された分散主義」の象徴としてこの「全学カード」が機能していたといえる。ただし、この全学総合目録の維持には日常の大変な労力を要し、この現場の苦痛を表現した館報原稿を当時の目録中心主義の部長が問題視したことは先に触れた100号記念特集に報告した¹⁴⁾。全学カード150万枚（以前ははるかに多い枚数であったが）にかけられた目録担当者の熱意とそのカード配列に苦闘した閲覧掛員の労力が、いつの日か名古屋大学の目録の歴史としてまとめられることを期待したい。

その繋ぎの意味で、<目録カード例>を出させていただく。図1は戦前の目録で、筆者はこのようなカードの存在を知ったとき、まず目録の先達へ畏敬の念をもったことを思い出す。このような目録作成及び利用法のために『印刷目録カード説明及使用方法』（昭和16年）という活版の冊子が残されている²⁹⁾。図2はガリ版による手書きカード、筆者にはこの経験をもたないが、次の図3の和文タイプライター方式は菅沼社製を使用し、和書の目録掛では7台のタイプが部屋中に「ガチャガチャ」という騒音を振り撒きながらしていた仕事を懐かしく思い出す。

目録・カードはいずれにしる、利用者が必要とする資料の情報を提示し、所在の空間＝書架へ案内する「道具」である。名古屋大学で図書の分類法がNDCの新訂6版から新訂8版へ切り替わっ

たのは昭和55年。このとき社会主義の分類が363から309に変わる（実は7版から）。このような分類変更は旧版図書を新版への書き換え、もしくはそこへの案内（代本板等）をすることにより統一性や空間＝書架の活きた姿を利用者に示す機会でもある。しかし、図書館の規模が大きくなるに従い（新築による10万冊、増築による30万冊の増）書架の活きた姿とした姿は薄らいで来たようである。かつて、開館前の10数分間書架整理をしながら、ひそかな蔵書との対話から1日の始まりを意識した時代を思うとき、現在の書架は単なる<物体>の集積場所という位置付けになっているのであろうか。分類番号は単なる<記号>としての意味しかなく、その場所を表示すれば足りるとする機能主義ですまされているかのようである。20万冊の学生用フロアは日常的に書架の乱れのなかにある。試験期における書架の混乱ぶりを、10数年振りに中央図書館に戻って見たときの驚きは特別であった。担当掛のみでなく、図書館全体として

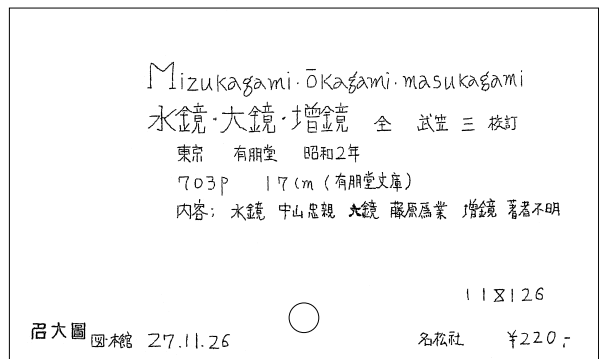


図2

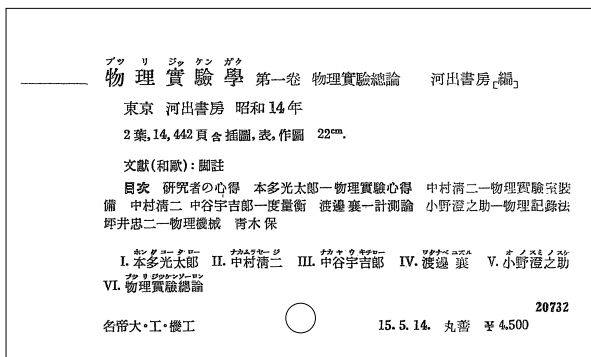


図1

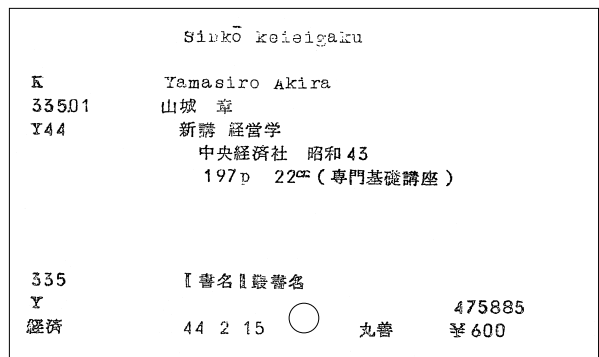


図3

このような混乱をさほど問題にしてこなかったのは、それを開架図書の常態とも思っていたのであろうか。

サービスの拡大が次々と図られ、図書館の活性化が謳われている最近である。このサービスの基礎には、利用者の利用しやすい環境＝書架の状態があるはずである。乱れたままの書架が放置され、月1度の書架整理も疎かにされがちな日常を、原点にもどって考える必要があるのではないか。また、新しい図書が入り、蔵書が増えることのみが書架の活性化ではない。書架が利用者の必要にどう応えているか、いわば、図書館が利用者に対応していく姿勢のなかにこそ、活性化があるように思える。

6. 電子化と現場感覚

この数年の電子ジャーナルの進展と普及振りには目を見張る思いである。直接この電子ジャーナルに関わらない人間にとっては、時代に取り残されていくような不安を抱くほどである。この電子ジャーナルの進展は資料全般の電子化とあいまって、図書館を大きく変貌させていくと思われる。筆者の幾つかのささやかな体験をとおしながら、この小論のまとめとしたい。

核融合科学研究所が名古屋大学キャンパス内から土岐市の現在地に移転する直前、研究所図書室への出向を命じられた。周囲460m、高さ50mの大型ヘリカル棟を中心とした土岐市の新研究所は広大な敷地と核融合研究における世界の最先端をいくという自負をもった若々しいエネルギーに満ちていた。先端研究所における図書室の設計という、任に余る課題を背負うことになった。大学図書館の経験しかない筆者にとって、研究所・専門図書館の現状を知ることが先決であり、東海村の原子力研究所図書室やトヨタ中央研究所図書室、横浜にある三菱重工の情報センター等を見学することからスタートせざるをえなかった。これらの図書室が大学とは違い、企業として、あるいは東海村原研としての大きな壁の中にあることを実感しながらも、これまでにない専門図書館としての大変良い勉強をさせていただいたと思っている。

わずかの視察や勉強からは特別な新しいイメージをつくれぬまま、新天地でしかも研究所の中央入り口部に設定された新図書館はスタートする

ことになる。それは、全蔵書のデータベース化であり、新着情報の提供、OPACと書架表示の連動、貸出の自動化や24時間の利用可能環境の設計という、従来の人力に頼った部分の機械化を進めたにすぎないといえる。研究所内に張り巡らされたLANで日常的に情報の交換は一般化しており、研究所の研究成果は図書館と隣り合った資料センターからレポート等として全世界に発信されるばかりでなく、各部門からも成果は日常的に情報発信されている。当時（平成6年）は未だ電子ジャーナルが開発の途上に有り、情報化の進んだ図書館としては、新着雑誌や図書の目次部を電子化して提供する段階であった。それでも、図書館の機能を高度化するほど、利用者は図書館へ足を運ばなくてよいシステムを目指すことに变りはないといえた。新図書館は研究者に来館の必要ないシステムを目指すという図書館不要論ともいべき逆説を抱えながら、一つの対案として提示したのが、電子的情報交換では替わり得ない、人的交流の場としての図書館の機能であった。各研究系ごとに研究者の交流の場は用意されているなかで、敢えて図書館ならではの空間を求めたことである。それは、研究分野の違う研究者が図書資料を媒介に、ブラウジングの過程で、あるいは息抜きの合間のコーヒーを飲みながらの雑談のなかから、新しい発想が生まれる空間を夢見たのである。

この核融合科学研究所には2年間の在任しか許されず、その後の具体的な新図書館の運営には関わることができなかったが、次ぎの教育学部図書室経験のなかで筆者なりに意図した電子化とは何かを記してみたい。

4の資料論でのべたように、教育学部には「高等学校史誌」や「旧制学校一覧」のように従来の図書館資料としては敬遠されがちな資料や、目録はとられていてもその内容が分からない資料等が存在していた。例えば明治初期の大阪河内地方の「学校資料」が古書店から購入されたままの状態ですぐに書棚の隅に積み重ねてあったり、教育史資料として複製した東海地区の社寺文書等が「定光寺」等というカード目録一枚で内容表示されていたり、多量のマイクロ資料が複製時の市販表題だけしか記録されていないというような状態で、いわば資料が眠ったままに放置されていた。前者は教育史講座との協同で「河内国学校資料」として、

社寺文書は愛知県史編纂室の全面的支援で「愛知県郷土歴史資料」として、マイクロ資料は掛員の努力で「マイクロ資料案内」のなかに、それぞれの目次部を電子化し、図書室のホームページから一覧できるようになっている。

小さな部局図書室では<電子図書館>を構える以前に、「図書」から敬遠されたまま埋もれている資料、手当てをしないと取り返しのつかなくなりそうな資料、自分をもっと表現してくれと訴えている資料等がそれぞれに存在しているであろう。その存在を知るのこそ<現場>であり、書棚やファイルケースの資料が存在を訴えている、そのことを感じ取るのが<現場感覚>といえるであろう。その資料からの<訴え>を<感受する姿勢>は現場でこそ育まれていくものと思う。

ところで、図書館における<現場>とは何か。カウンターで日々利用者と接していた閲覧掛や学部図書室の時代は毎日が現場そのものであったし、部局から送られる図書の目録に追われていたときは新しい資料への関心であり、古書の持つ表情を読み取る目録作業の場こそ現場であった。筆者にとって掛の異動は、その現場からの離脱であり、新しい現場への不安と期待を抱くあたかも恒例の儀式のようなものだったといえる。10回余の異動で最後に現在の資料管理掛という職務内容を表現しづらい新設の掛担当となったさい、最もとまどったのはこの掛に現場があるのかという疑問であった。利用者も資料そのものも直接対象にしない業務のなかで、それに対置しうるものがあるのかという自問自答の4年間であった。

結論的にいうならば図書館の<現場>とは、<モノを介した交感の場>といたい。このモノには図書資料はもちろん、利用者も含まれるし、書類としての図書原簿等も包含する。カウンターが利用者との<現在の交感の場>であり、目録業務が資料をとおした<過去や未来との交感>というならば、昨年来の法人化に向けた図書原簿の整理は、130年の図書受入をとおした<歴史との交感>であることを実感している国立大学としての清算作業である。

7. おわりに

大学図書館員としてのこの37年間、名古屋大学では延べにして850人弱、前任地の岡山大学では

65人の図書館の人たちと、そして両大学で数え切れない利用者(学生、研究者、市民等)との交感のなかで育てていただいたと思う。新任地岡山での<利用者のための図書館>という刷り込みはその後折に触れて反芻する観念であるが、名古屋ではさらに、目の前の利用者の背後にいる人たちを意識する作業<だれのための大学図書館か>、<税金で食い扶持を得ている自分>を認識させられてきたとも言えそうである。

かって産学協同反対が大学の前提のようにいわれた時代があり、いまや国民に開かれた大学、地域への貢献を果たす大学図書館が謳われる時代であるが、筆者には基本に流れる精神は共通ではないかと思っている。図書館が特定の権力や社会勢力への奉仕でなく、その資料(情報)を必要とする人へ提供できる場であること、このことが岡山、名古屋をとおして学んで来たことと言えそうである。

最後に、このような論文発表の場を『研究年報』として広げていただいた伊藤館長に、先の文献目録作成³⁰⁾が科研費申請を全館に呼びかけられたことがきっかけとなったことと併せ、感謝したいと思います。先進的に図書館行政を推進しようとしている伊藤館長と図書館を改善しようとする現場の意欲がぶつかり合いながら、緊張と協調のなかで法人化後の新しい図書館をめざしていくことを期待して、謝辞とさせていただきます。

Note

- 1) 島岡「医学部史料室紹介 2 - 外人教師とその周辺 -」(名大医学部学友時報 No.442, 昭和61.11)
- 2) 田中英夫「溶明の頃 - 司書清川陸男の事など -」(館燈・名古屋大学附属図書館報 No.83, 1986.)
- 3) 寺田良喜訳編『ロシア・ソヴェト人名辞典(原稿)』全15巻, 1973複写作成完了. <中央図書館参考図書 283.8/Te>
- 4) 寺田良喜「<ロシア・ソヴェト人名辞典原稿>について」(大学図書館研究 No.1, 1972)
- 5) 川原和子『欧米貴重書図書館の慣行 - 保存修復を中心として』(一橋大学社会科学古典資料センターStudy series No.9, 1985.3)
- 6) 川原和子「昭和61年度国立大学協議会賞受賞に寄せて - 候補作品が生まれるまで -」(館燈・名古屋大学附属図書館報 No.83, 1986.8)
- 7) 『大学資料』1号(昭和30.12) -, 文部省大学学術局編監修, 平成10年10月から文部省大学教育研究会監修.

- 8)『大学図書館協力ニュース』(国公立大学図書館協力委員会編)1巻1号(1980.5),委員長は横越名大館長,当時の文部省情報図書館課長遠山敦子氏の創刊祝辞を掲載.
- 9)野田正一「岡山大学におくる指定図書制度」(大学図書館研究 No.2,1973)〈昭和47年度岸本奨励賞〉
- 10)島岡「指定図書の運用について - 特に自由接架式の場合 - 」(中国四国地区大学図書館協議会誌11号,1968)
- 11)『図書館関係文献目録集成』『図書館情報学研究文献要覧』による.
- 12)名古屋大学でも最近では平成7年から11年にかけて試行を行い,中止している.
- 13)岩猿他『大学図書館の管理と運営』1992,p117.
- 14)『図書館情報学用語辞典 第2版』平成14,p90.
- 15)『参考図書選択目録 - 1966 - 』名古屋大学附属図書館,1968.
- 16)東京大学総合図書館職員組合編刊『東大図書館に進行する人権破壊』1980.7.
- 17)島岡「ベルリンの壁に思う - 二つの編集体験から - 」(館燈・名古屋大学附属図書館報 No.100,1990.11) 発刊100号記念特集.
- 18)前野みち子「充実した蔵書をめざして」(館燈・名古屋大学附属図書館報 No.148,2003.8)
- 19)島岡「私の勤めるこの1冊 - 読書欄新聞 - 」(名古屋大学職員組合教養部言語文化部支部ニュース No.65,1993.6)
- 20)小島清秀「医学部〈史料室〉の整備完成にあたって」(名大医学部学友時報 No.439,昭和61.8)
- 21)島岡「“医学部史料室”開設」(館燈・名古屋大学附属図書館報 No.83,1986.8)
- 22)島岡「医学部史料室紹介 1 - 4」(名大医学部学友会時報 No.441,442,445,448)
- 23)島岡「史料紹介・医事新報」(名古屋大学史紀要 1号,1989)
- 24)奈良坂源次郎編著『解剖学者奈良坂源一郎』
- 25)(予)奈良坂源次郎編著『完本解剖学者奈良坂源一郎伝』
- 26)島岡,篠田「『旧制学校一覧』所蔵目録について」(名古屋大学教育学部紀要(教育学)4巻2号,1998.3)
- 27)佐々木亨「高等学校の沿革史・記念誌の所蔵目録について」(中等教育史研究 7号,1999)
- 28)田中克彦著『法廷にたつ言語』恒文社,1983.
- 29)『印刷目録カード説明及使用方法 - 雑誌扁 - 』名古屋帝国大学附属図書館,昭和16年,51p.
- 30)島岡「愛知県に於ける『癩』関係文献目録(稿)」(名古屋大学附属図書館研究年報 第1号,2003)

表1 人員配置変遷表

	昭和44 10	昭和45 10	昭和46 10	昭和47 10	昭和48 10	昭和49 10	昭和50 10	昭和51 10	昭和52 10	昭和53 6	昭和54 5	昭和55 5	昭和56 5	昭和57 5	昭和58 5	昭和59 5	昭和60 5
館長	保田	保田	保田	保田;	横越	横越	横越	横越	横越	横越	横越	横越	横越	横越;	柘植	柘植	柘植
部長	男沢	男沢	男沢	男沢	男沢	男沢	男沢	男沢;	藤井;	平	平	平	平;	高沢	高沢	高沢;	秋谷
整理課長	槐	槐	槐	槐	槐	槐	槐	槐;	岸本	岸本	岸本;	関	関;				
管理課長														吉岡	吉岡	吉岡;	矢野
補佐										1	1	1	1	1;	1	1;	1
庶務掛長	1	1	1;	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1;
掛員	4;	3	3;	3	3;	3	3;	3	3	3;	3	3;	3	3;	3	3(34)	2
補佐員	1	2;	1	2;	2	2	2;	2;	2	2	2;		1	1	1	1	1
会計掛長	1	1	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1
掛員	3	3;	3	3;	3	3	3;	3	4	3	3;	3;	3;	2	2;	2	2;
補佐員	2;	1;		1;	1;		1	1;	1	1	1	1	1	1	1	1	1;
受人掛長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1
掛員	2	2	2	2;	1;		1	1;	1	1	2;	2	2;	3;	3;	2	2;
補佐員	2;	1	2;	2;	2;	3;	2;	2;	2	2;	1;	1	1	1	1	1	1;
資料管理掛長																	
第一整理掛長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1				
掛員	5;	5;	5;	5	5	5	5	5	5	5;	5;	3;	3				
補佐員	1	1	1	1;	1	1	1	1	1	1	1	2	2				
第二整理掛長	1	1;	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;				
掛員	5;	4;	4	4	4(23;)	3;	2;	3;	3	3;	2	3	3				
補佐員		1	1;	1;	1;		1;	1	1;	1	2	2;	2				
閲覧課長	玉木	玉木	玉木	斎藤	斎藤	斎藤	斎藤	斎藤	斎藤	関	関	田中	田中				
サービス課長														田中;	長	長;	石川
補佐	1	1;	1	1	1	1	1	1	1;								
専門員																	
閲覧掛長	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1	1;	1	1
掛員	4	4;	4	4	5;	4;	4	4;	3	3;	3;	4	4	5;	5;	5;	5;
補佐員	2;	3;	3;	3;	3;	3;	4	4	4	4;	4;	3	4;	4	4;	4;	5;
参考掛長	1	1;	1	1;	1	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1;
掛員	2	3	3;	3	3	3	3;	3;	2	2	2;	2;	2;	1;	1	1	1;
補佐員	2;	2	2;	2	2;	2;	2	2;	1	1;	1	2	2;	1	1	1	1;
情報資料掛長									1	1	1;	1	1;				
掛員									1	1	1	1	1;				
補佐員												1;					
相互協力掛長														1;	1	1	1
掛員														1	1;	1	1;
補佐員														1		1	1;
システム課長														関	関;	森岡	森岡
専門員																1	1
学術資料掛長														1;	1	1	1
掛員														1	2	2	2;
補佐員														1	1	1	1
システム管理掛長																	
掛員																	
雑誌掛長																	
掛員																	
補佐員																	
第一情報掛長														1	1	1;	1
掛員														3	3;	3	3
補佐員														2;	2	2	2;
第二情報掛長														1	1	1	1;
掛員														3;	3;	2	2;
補佐員														2	2;	2	2;
目録情報掛長																	
掛員																	
補佐員																	
図書情報掛長																	
掛員																	
補佐員																	

昭和61 5	昭和62 7	昭和63 7	平成1 7	平成2 7	平成3 7	平成4 5	平成5 5	平成6 5	平成7 5	平成8 5	平成9 5	平成10 4	平成11 4	平成12 4	平成13 4	平成14 4	平成15 4	人数
柘植	柘植	柘植;	斎藤	斎藤	斎藤;	潮木	潮木	潮木	潮木	潮木	潮木;	戒能	戒能;	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤	12
秋谷;	坂東	坂東;	牧	牧	牧;	木本	木本	木本;	金子	金子;	袴田	袴田;	田村	田村;	吉田;	内藤	内藤	
矢野;	松浦	松浦;	桑田	桑田	桑田;	大埜	大埜;	三浦	三浦;	田村	田村;	木村	木村;	藤森	藤森	藤森;	北村	13
1	1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1;	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	9
1	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	9
2;	1;	1	1;	1;	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	19
1	2	2	2	2	2;	2	2	2	2;	2	2;	2	2;	2	2	2	2	13
1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	1	11
2;	2	2;	2	2;	2;	1	1;	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	16
							1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
1;	1	1	1	1;	1;	1	1	1	1;	1;	1	1	1;					9
3	3;	2	2	2;	2;	2	2;	2;	2;	2	2;	1	1;					18
1	1	1	1	1	1	1;						1;	1;					15
														1	1	1	1	1
																		1
																		9
																		2
																		4
																		8
																		6
石川	石川;	渡邊	渡邊;	青山	青山	青山;	前野	前野;	吉田	吉田	吉田;	三池	三池;	玉木	玉木;	白井	白井	13
																		2
										1;	1	1	1	1;	1	1;	1	4
1;	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	10
4	4;	4;	3;	3;	3;(30)	2;	2;	2;	2;	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	27
5;	5;	5;	6;	6	6;	7	7;	7	7;	7;	7;	6;	6;	6;	5	6	5	37
1;	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	12
1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1;	2	1	17
1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	11
																		2
																		1
																		1
1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1;	1;	1	9
	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1;						5
2;	1	1	1	1;	1	1	1	1	1	1	1;	1	2	2	2	2	2	6
森岡;	坂口	坂口;	中島	中島;	前畑;	下村	下村;	永野	永野;	田中	田中	田中;	小花	小花	小花;	郡司	郡司	10
1	1;	1	1	1	1	1;	1	1;	1;	1	1	1;	1;	1;	1	1;	1	9
1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1;	1;							6
2	2;		1;	1;	1	1	1	1;	1	1	1;							8
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1;							1
												1	1;	1	1;			2
												1	1	1	1			2
												1	1	1	1;	1	1	2
												2;	1	1	1	1;	1	3
1	1	1;	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	1;							6
3;	2;	1	2	2	2	2	2(24)	1	1	1;	1;							7
2	3	3	3	3;	3	3	3	3;	3;	3;	3;							10
1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1;	1;							6
2;	2;	2	2;	2;	2	2;	2	2;	2;	2;	1;							13
2	2;	2	2	2	2	2;	2	2	2	2	2;							6
												1	1;					1
												2;	2;					3
												4	4;					4
														1;	1	1;	1	3
														2;	2;	1	1	3
														5;	4;	5;	4	6

	昭和44 10	昭和45 10	昭和46 10	昭和47 10	昭和48 10	昭和49 10	昭和50 10	昭和51 10	昭和52 10	昭和53 6	昭和54 5	昭和55 5	昭和56 5	昭和57 5	昭和58 5	昭和59 5	昭和60 5
医学部専門員																1	1;
医学部図書掛長	1	1	1	1;	1	1	1	1	1	1;							
掛員	4	6	6;	5;	4	5	5	5	5	5;							
補佐員	1;	1;	3;	4;	4;	4;	2	2	2	2;							
医学部整理掛長											1	1	1	1	1;	1	1
掛員											1	1	1	2;	2;	1	1
補佐員											1	1	1;				
医学部閲覧掛長											1;	1	1;	1	1;	1	1
掛員											2	2	2	2	2;	2	2;
補佐員											1	1	1;	1	1	1	1
医療短大掛長															1	1	1
掛員																	
補佐員																	
保健情報掛長																	
掛員																	
補佐員																	
文学部図書掛長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1;
掛員	2;	2	2	2	2;	2	2;	2;	2	2	2	2	2	2	2	2	2
補佐員						1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1;	
教育学部図書掛長	1	1	1	1	1;	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1
掛員	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1(26)
補佐員		1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1;	1	1;	1	1	1	1	1
法学部図書掛長	1	1;	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1
掛員	4;	4;	4;	4	4	5	5	5;	4	4;	4	4;	3;	3	4	4	4;
補佐員										1	1	1	1	1	1	1	1
経済学部図書掛長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1(21)	1	1
掛員	7;	5	5;	5	5;	6;	5	6	6	6;	6	6;	6(22)	7	7;	7	7;
補佐員	2;	2;	3	3	3;	2;	2	2	2	2;	2	2	2;				
国際開発掛員																	
補佐員																	
教養部図書掛長	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1;	1;	1
掛員	6	7;	6	7;	7;	5	6;	5	5;	5;	5	5	5;	2	2;	2	2;
補佐員	2	3;	3;	3;	3	4;	3	3	3	3	3;	3;	3;	2	2	2	2
情報文化掛長																	
掛員																	
補佐員																	
理学部図書掛長	1	1	1	1;	1	1;	1	1;	1	1	1	1	1	1;	1	1;	1
掛員	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
工学部図書掛長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1
掛員	4;	4;	3	3	3;	3	3	3	3	3;	3;	2;	2;	1;	1	1	1
補佐員	1;		1	1	1	1	1;	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
農学部図書掛長	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1	1;	1	1	1	1	1;	1	1
掛員	4;	3	4	4	4	4	4;	4	4;	3;	4	4;	4	4;	4;	4;	4
補佐員	2	2;	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1	1;	1;	1	1;	1
プラ研図書掛長	1	1	1;	1;	1	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1
掛員	2	2	2	2	2	2	2	2;	1	1	1	1	1	1;	1	1	1
補佐員	2	2	2;	3;	3	3;	2	3;	4;	2	2	2	2	2	2	2	2
部課長人数	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4
異動人数/年数	0/0	0/0	1/6	0/0	0/0	0/0	0/0	2/20	2/7	0/0	2/5	0/0	2/6	1/3	1/2	3/8	0/0
補佐・専門員人数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3
異動人数/年数	0/0	1/6	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/7	0/0	0/0	0/0	0/0	1/5	0/0	1/2	1/2
掛長人数	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	18	18	18	20	20	20	20
異動人数/年数	0/0	4/23	2/13	5/20	3/22	2/11	1/5	3/9	1/6	6/46	6/40	1/4	6/22	7/39	9/46	5/14	4/15
異動率	0%	24%	12%	29%	18%	12%	6%	18%	6%	35%	33%	6%	33%	35%	45%	25%	16%
経験年数	0 0	5 8	6 5	4 0	7 3	5 5	5 0	3 0	6 0	7 7	6 7	4 0	3 7	5 6	5 1	2 8	3 8
掛員人数	60	59	58	58	57	55	55	56	54	52	51	51	51	49	51	50	49
異動人数/年数	10/62	8/27	8/33	5/37	8/81	2/22	9/55	12/49	2/27	17/130	5/30	8/74	12/90	8/44	15/59	3/38	13/70
異動率	17%	14%	14%	9%	14%	4%	16%	21%	4%	33%	10%	16%	24%	16%	29%	2%	27%
経験年数	6 2	3 4	4 1	7 4	10 1	11 0	6 1	4 1	13 5	7 6	6 0	9 3	7 5	5 5	3 9	12 7	5 4
補佐員人数	20	22	25	28	28	27	26	27	27	26	26	26	26	24	24	25	24
異動人数/年数	8/8	9/15	7/13	10/19	8/22	10/24	4/13	6/24	3/7	8/36	6/34	4/18	7/35	1/1	3/9	3/9	10/51

昭和61 5	昭和62 7	昭和63 7	平成1 7	平成2 7	平成3 7	平成4 5	平成5 5	平成6 5	平成7 5	平成8 5	平成9 5	平成10 4	平成11 4	平成12 4	平成13 4	平成14 4	平成15 4	人数
1	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	1	1	1;	1	1	6
																		2
																		8
																		5
1	1;	1	1;	1	1	1	1;	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	9
1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	8
																		1
1	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	9
1	1	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1	8
1;	1	1;	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	6
1	1	1	1;	1;	1	1	1	1;	1	1;	1	1;	1;					6
																		4
1	1	1	1;	1;	1	1;	1	1	1	1	1	1	1;					4
														1	1;	1	1	2
														1	1	1;	1	2
														1	1;	2	1	3
1	1	1	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	1	8
2;	2	2	2	2	2	2	2	2;	2	2;	2;	1	1;	1	1	1;	1	10
						1	1	1	1	1;	1	2	2	2	2	2	2	6
1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1	8
1	1	1	1;	1	1	1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1;	1	6
1;	1;	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
1;	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	11
4;	4	4	4;	4;	4;	3	3;	3;	3;	2	3;	4;	4;	3	3;	3;	3	25
1	1;					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
1;	1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1	1	7
7	7	7;	6;	6	6	6;	6;	6;	6;	5;	4;	4;	4	4	4;	4	3	24
			1	1;	1;	1	2	3;	1	1	1	1;	2	2	2;	2	2	15
									1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	3
									2	2	2;	2	2	2	2	2	2	3
1	1	1	1;	1	1	1	1	1;										8
2	2;	2	2	2;	2;	2;	2;	2;										20
2	2	2	2;	2	2	2;	2;											11
								1	1	1	1;	1	1	1	1;	1;	1	4
								2;	2;	2;	2	2	2	2;	2;	2;	2	8
								2	2;	1	1	1	1	1	1	1	1	2
1	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1;	1;	1;	1	1	1	1;	1	12
1	1	1	1	1	1	1(x 24)	1	1	1	1	1	1;						2
1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1	1	7
1	1	1	1	1	1;	1	1	1	1;	3;	2;	2;	4;	5	5;	4;	4	18
1	1	1;																3
1	1	1	1	1;	1	1	1;	1	1	1	1;	1	1;	1	1	1;	1	10
4(x 22)	4;	4;	4;	4;	4;	4;	4;	4;	4;	4;	4;	4	4;	4;	4;	4	5	30
1	1	1	1	1;	1	1;	1;			1	1	1;	1;					11
1	1;	1;																7
1;	1	1;																4
2	2;	2;																11
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
3/7	1/3	3/6	1/2	1/2	3/7	1/3	2/4	2/5	2/4	1/2	2/5	2/5	2/4	1/2	3/6	1/3		
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	
0/0	2/7	0/0	0/0	0/0	2/10	1/5	0/0	3/9	2/2	3/4	0/0	1/3	2/4	2/5	2/7	2/4		
21	21	21	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	
6/15	7/22	3/7	10/35	7/28	7/22	4/13	7/25	6/17	5/19	8/23	8/21	8/21	7/18	6/17	9/26	7/13		
29%	33%	14%	50%	35%	35%	20%	35%	30%	25%	40%	40%	40%	35%	30%	45%	35%		
2 5	3 1	2 3	3 5	4 0	3 1	3 3	3 6	2 8	3 8	2 9	2 6	2 6	2 6	2 8	2 9	1 9		
46	44	40	39	38	39	36	36	35	35	35	33	33	33	32	32	30	30	
8/53	11/49	6/18	11/58	9/32	8/75	10/49	12/76	11/49	13/53	11/49	13/32	9/27	9/25	6/21	12/43	9/21		
17%	25%	15%	28%	24%	20%	28%	33%	31%	37%	31%	39%	27%	27%	19%	38%	30%		
6 6	4 5	3 0	5 3	3 6	9 4	4 9	6 3	4 5	4 1	4 6	2 5	3 0	2 8	3 5	3 6	2 3		
25	26	25	24	24	25	27	28	28	28	28	26	29	30	29	27	30	30	
4/13	5/35	6/34	5/17	5/19	3/15	6/28	4/20	3/11	5/18	3/24	10/65	6/24	6/17	2/5	4/10	3/20		

表2 国立大学図書館関係予算推移

	図書館経費	図書館維持費	マイクロー等経費	L Cカード	電算化	電算維持費	特別業務経費	古文書	雑誌センター	機高経費	国立大学図書館経費	図書購入費	学生用図書	指定図書	参考図書	特別図書	大型(外国)	外国雑誌(自然)	図書購入費	電子的資料	C D-ROM	視聴覚機器	マイクロー等装置	近代化設備費	ブックエディション	電動集塵等	大型特別機械	情報学センター	学センター設置調査	学センター開発調査	DB作成等経費	東大センター	DB作成経費	研修費		
昭和42年度											294	144	50		83																					
昭和43年度											290	150	49		74																					
昭和44年度											538	156	58		74																					
昭和45年度												189	58		74																					
昭和46年度					40						718	229	58		74								52	93												
昭和47年度				30	17						942	288	58		74								26													
昭和48年度		338	95	30	31						1083		306	58	37	74							26													
昭和49年度		376	112	29	29							340	58	41	74								26													
昭和50年度		750	132	29	50							1048	63	53	93																					
昭和51年度		782	246		48							1200		51	86								11						11							
昭和52年度		791	321		43							1268		49	99		144						11	54					38							
昭和53年度	1235				61							1928			129		215																			
昭和54年度	1387											2637			327	300	323						56													
昭和55年度	1540	1146		29	25	7	7				3109	3010					694						99						1							
昭和56年度	1671	1230		29	67	21	10	11			3136	3043					713						92						2	24						
昭和57年度	1682	1230		28	113						2817	2743											75						2	29	177	43	34			
昭和58年度	1734	1169		28	165						2521	2466											55						2	29	184	91	34			
昭和59年度	1783	1183		28	231						2446	2419											28						2		190	410				
昭和60年度	1858	1183	321	28	305	18	8	11			2021	2004	1286		38	78	174	369	58				17	17				2		201	472	34				
昭和61年度	1652	1187	321	28	415	19	8	12			2090	2075	1308		34	81	174	438	40				15	15					1025	215	894	84	6			
昭和62年度	1971	1185		28	524						2173	2160	1313		31	81	174	506	55				14	14					1564						6	
昭和63年度	2059	1184		28	606						2290	2281	1349		34	81	186	574	57				9	9	81				1786						6	
平成1年度	2252	1229	217	29	760	18	3	14			2383	2373	1348		35	84	192	627	87				87	9	140			2382						6		
平成2年度	2373	1237	222	29	862	22	4	19			2438	2429	1363		35	88	192	662	89				89	9	132										7	
平成3年度	2513	1244	254	29	965	22	4	19			2357	2347	1301		34	85	182	629	116			0	0	9	9	196									7	
平成4年度	2593	1264	254	29	1023	23	4	19			2363	2328	1186		31	89	182	629	183			13	13	35	9	149									7	
平成5年度	2667	1279	254	29	1083	23	4	19			2446	2411	1192		31	166	182	629	183			13	13	35	9	170	113								7	
平成6年度	2706	1278	254	29	1122	23	4	19			2446	2411	1141		29	173	182	661	175			13	13	35	9		0								7	
平成7年度	2768	1321	254	29	1130	23	4	19	12		2698	2425	1159		29	180	182	694	182	80	170	13	272	9		202									7	
平成8年度	2928	1320	254	29	1133	23	4	19	170		2502	2226	1049		26	165	164	657	166	102	153	12	275	8		202									7	
平成9年度	2958	1320	254	29	1071	23	4	19	261		2535	2259	1049		26	168	164	687	166	102	153	12	275	8		289									7	
平成10年度	2962	1122	254		1064	21	2	19	501		2209	1994	933		23	128	82	675	153	102	96	8	214	8		184									7	
平成11年度	3265	1135	254		1014	21	2	19	842		2201	1986	933		23	129	82	690	129	102	96	8	214	8		213									7	
平成12年度	3197	1135	254		889	21	2	19	898		2154	1987	933		23	130	82	690	129	102	48	8	166	8		169									7	
平成13年度	3087	1135	254		784	21	2	19	893		2100	1966	938		23	131	64	690	120	102	19	4	134	8		104									7	
平成14年度	3276	1134	254		708	21	2	19	1159		1630	1546	547		23	126	53	702	95	53	19	4	84	8		49									7	
平成15年度	3310	1020	190		678	21	2	19	1400		1459	1399	548		23	89	0	639	101	29	19	4	60	8											7	